

特集

4 **ぼくらがZINEを作る理由**

ウチダゴウ／ハラヒロシ／越ちひろ／山崎美帆／Pom Pom
G.books／美篤堂／ZINE展参加者紹介

16 **めしでもいきますか？**

中野市 三幸軒の「三幸ラーメン」

17 **はあるかぶり** 第四回

森山裕之のコラム

18 **と**

カフェ&ギャラリー オーナー 熊谷俊行と 画家 成瀬政博

20 **私的文化史**

amijok 小島 剛

21 **二十四の浩美／漫画一コマ人生相談**

22 **韓流 ちえごちえご**

23 **ch.Information LIVE in NAGANO**

26 **寝顔美人**

「チャンネル」は、
長野市の小さな本屋「ch.books」から発行しているフリーペーパーです。
「LIVE IN NAGANO」をテーマに、長野県に生きる人やものに対して、
派手に飾り立てずに手を抜かず、
マジメすぎずにバカすぎず、丁寧に掘り下げていきます。
今回の特集は、ch.booksで2月10日から開催しているZINEの企画展にちなみ、
「ぼくらがZINEを作る理由」と題し、出展者たちの思いを届けます。
近頃は出版不況だとか、今さら紙だとかいろいろなのがささやかれています、
表現したいものを自由に作る彼らからは何だか明るい未来も感じました。
やっぱりぼくらは本が好きで、本を作ってみたくらいから作っている。
今回、自由に作られたZINEに触れ、それでいいじゃないかと思ったりしています。



ZINEのこと

ZINE。

カッコいい響きだ。

以前は、同人誌とかミニコミ、リトル・マガジンなどと言っていた。

かつてそう呼ばれていたものが、今はZINEと呼ばれることが多くなった。

個人的にはまだ呼び慣れない。

今回「チャンネル」が、ZINE（個人で出版する刊行物）の特集をすると聞いた。

私が初めてひとりで作ったZINEは「イナゴの採り方」というものだ。

小学校低学年の頃だったと思う。

当時熱中していたイナゴ採りの方法を、古文書のような形式で綴った。手書きなので一部しか存在しない。

しかしそれは日記ではなく、客観的な目を意識した「書物」だった。

出来上がり満足し、机の中に大切にしまっていた。

大学三年生の時——1994年12月、ひとりではないが、友人たちと「雑誌」を創刊した。

ワープロのインクジェット紙を版下として、大学の印刷機にコピー用紙を持ち込んで刷り、皆で折り、ホチキス綴じをした。

高校時代の友人や、当時入っていた寮の住人がメンバーだった。

当時はインターネット前夜だったから、文章やイラスト、写真、デザイン、なにか平面上で表現したければ、どこかに投稿するか、自分たちで印刷するしかなかった。

みえない雑誌 B5、中綴じ、1色、28頁。

久しぶりにその創刊号を引っ張り出してきた。

どんな話し合いの結果、このタイトルで、この版型で、このページ数で、このメンバーで作ることになったのか。

思い出せない。

執筆者の何人か、どんな人だったのかも思い出せない。

今回、まともに自分の文章を読み返すこともできなかった。

でも、決して戻ることのできない二十歳の自分が、そこには確かにいた。

掲載されている文章のフロッピーディスクのデータはもう再現することはできないが、雑誌（ZINE）は捨てない限りいつも眺めることはできる。

こうしてまた会うことができた。

二十歳の私はとてつもなく恥ずかしいやつだったが、彼なりに頑張っているようだった。

ZINEは、個人の表現であるが、同時にその時代、時間を永久保存する箱でもある。

ある個人と時間の交わりの数だけZINEは存在する。

今日も世界のあらゆるところであらゆる人たちがZINEを作っている。

何を表現しようか。どんな紙にしようか。どんな色で刷ろうか。誰に届けようか。

そんなZINEに出会うために今日も町に出るのだ。



森山裕之（もりやま・ひろゆき）

1974年長野市生まれ。獨協大学外国語学部在学中の1994年から、仲間と共に「みえない雑誌」を自主制作。2000年まで全11号を発行した。「クイック・ジャパン」編集長を経て、現在はヨシモトブックス／マンスリーよしもとPLUS編集長を務める。また、小説、エッセイ、マンガなど、編集した単行本も多数。TBSラジオ「文化系トークラジオLife」ではサブ・パーソナリティーも担当し、「チャンネル」では自伝的エッセー「はあるかぶり」も連載中（P17）。



ぼくらが ZINEを 作る理由

好きな音楽や作家のこと、写真やイラスト、詩、日々の記録…。
表現したい人が好きなように手で作り、販売・交換するZINE（ジン）。
一般書店の流通とは別の、独自の流通で作り手と読み手をつなぐZINEは、
新たなコミュニケーションをもたらす新しい本の概念として、可能性が広がっています。
さて、ただいまch.booksでは「ZINE展」を開催中。
誰かが作ったものを見て何かを感じて、新しい何かが生まれる気がします。
皆さん、どんなZINEを作ったのか、ちょっと教えてもらいましょう。

取材・文＝島田浩美 写真＝内山温那／モモセビロコ（P11）



ウチダさんの著書『かたりべからず』『おこのもり』(ゆっくり堂)と、先月リリースされた詩集『空き地の勝手』。事務所は松本市里山辺にあり、相談型の貸本屋「ブックパッカーのアンテナサイト」も兼ねている

詩集を新しくリリースしたことで 今まで避けていたものにも挑戦

——ウチダダゴウ



NPOやNGO、学校など、ソーシャルな課題についての広告デザイン、ディレクションと、本を使ったイベント「ブックパッカー」、相談型の貸本屋「ブックパッカーのアンテナサイト」の運営を行っている「してきなしごと」代表で、詩人のウチダゴウさん。独立3年目を迎える今年、自らの言葉で人に話しかけ、返事を聞き、語り合いたいという理由で、新たに出版部門を立ち上げ、第1弾として詩集『空き地の勝手』をリリースした。ウチダさんも、今回のZINE展に出展する。

●今回出展予定の作品を教えてください。

実はまだ詳細を決めていないのですが「誰も知らない、詩の正しい書きかた読みかた」のような感じの作品にしようと思っています。これを読めば「わっはっは、詩なんて恐れるに足らず！」と豪語できるような。そんな作れるのかなーと思いつつ(笑)。●そもそもなぜ参加しようと思ったのですか。

去年の10月に、chloodesのふたりに誘われたから(笑)。過度にマニアックな世界はあまり好きではないので、普段はそれほど興味がないのですが、今回はなぜか単純に誘われて「じゃ、やるっか」みたいなノリでした。たぶん、詩集『空き地の勝手』を作って、今まで避けていたものにも気軽に乗ってみる勢いがあるからかも。

●「空き地の勝手」はリトルプレスとして出版されましたが、このリトルプレス作りは今後も続けていきますか。出版は続けていくと思いますが、とりあえずは目の前の500部を売らなきゃいけないという気持ちはありますね。それに、最初から「こまごまやる」と言ってしまうと、できなくなった時に收拾がつかなくなるから、できそうだったら出版する感じです。

「してきなしごと」という屋号も、詩的と私的の両方の意味があるんですが、やりたいことなら何でもできるような感じでおきたくて付けた名前。ただ、わかりづらい名前でもあるので取っ

付きづらいかも。皆さん、もっと気軽に会いに来てください(笑)。

●ところで、最近ホームページをリニューアルされましたが、ウェブではなく紙媒体としてリリースしたのはなぜですか。

…ウェブは、苦手だから(笑)。ホームページも友人に作ってもらったんですが、ウェブは浅知恵ではできない領域だと思えます。ブログをちょっと足すといった簡単なものにはできるけど、かといって紙媒体が絶対！とも思っていないんですけどね。

●実は、今回の詩集は2010年秋に出版を決めて、当初は某電子書籍サービスからの出版を考えていました。でも、作り進めるうちにこれはただのPDFだと思えてしまった。ページ送りのしかたも、横書きの文章は読みやすいけど、縦書きの文章は読みづらいものだった。そういった意味では、電子書籍には一応めぐる機能等はあるけど、なんだか書籍という概念までは来ていない気がしています。

SNSもツイッターやフェイスブックが台頭してきてやっとな実感してきたので、それと同様にいつかは馴染む時期が来るとは思いますが。

●印刷所にこだわったというお話を聞きました。

いくつか印刷通販の見積を出したんですが、納得いくものがなくて、ふと地元で探して出合ったのが藤原印刷。そしたら、当時ちょうど読んでいた西村佳哲さんの「いま、地方で生き

るということ」の印刷をされていて、さらに、担当者が近所だった(笑)。

●だから最初から地元でという意識があったわけじゃないんです。ミシマ社(三島邦弘さんの「計画と無計画のあいだ」ではないですが、プランニングしているような、していないような。でも「地産地消」の意識はあって、土壇場で、地元にある！と。そうなるプランはほとんど勝手に立つので、あとは流れに乗っかるだけでした。

●詩はいつ書いているんですか。ぼくは詩集のテーマを決めてから、そのパーツを埋めて行くイメージで作っています。たぶん、普通は詩自体を書いて、それをまとめていくうちにテーマが出てくる方法が一般的だと思いますが、テーマがあった方がおもしろいですよ。さまざまな見方や部分を組み合わせて、どんどん完成していく感じです。

●詩を意識したのはいつからですか。書き始めたのは高校生の頃からです。詩を読むのが好きだったわけではなく、ただ字を書くのが好きだったんです。高校時代は、授業中、先生が書く黒板の板書だけじゃなく、先生が喋る言葉も全部ノートに書いていました。授業の内容を完璧に書ききれいに書き写す行為が楽しかったんです。だから、書くという動作をしたくて、最初は小説を書くことと

思っていました。でも長いストーリーの展開を考るのがめんどくさい(笑)。で、だんだん短くなって、まあこれ詩

かな、と(笑)。高校生になると自我が芽生えるから、自己とは何かというフラストレーションを詩に発散していましたね。

●大学在学中も詩を書いていて、卒業後、友人を介して出会ったコピーライターの方が「詩を書くならコピーも書ける！」と。無茶なことを言うなあと思いつつ、詩を書く技術や考え方を活かせるかも、と手伝い始めました。それが、現在の仕事に至っています。

●さまざまな人々と「会って、話す」目的で出版部門を立ち上げたと思いますが、出版したばかりの『空き地の勝手』で手応えはありますか。

詩集を販売してくれているお店の方から、装丁や内容に対してうれしいコメントをいただいたり、読んだ方がさっそくメールをくださったたり。ZINEやリトルプレスの良さは、こういう小さなコミュニケーションを大事に積み重ねられるところだなと。まさに「会って、話す」です。あ、そんな予感がしたから、このZINE展の誘いに乗ったのかもしれないね。

The reason we make ZINE

profile

ウチダダゴウ *Uchida Dago*

1983年広島県生まれ。詩人、立教大学法文学部卒。詩・物語・絵本などの執筆・創作。コピーおよびテキストライティング、印刷物のデザイン、NPO、NGOや学校など、ソーシャルな課題についての制作プロデュースを行う。また、本のアクション「ブックパッカー」も運営。2012年、リトルプレス作りをスタート。出版第1弾は、1月21日に発行した自身の詩集『空き地の勝手』。



右は、ITが発展した下界で、一人前のウェブクリエイターを目指して奮闘する忍者・ウルトラエルを主人公にした漫画。ZINE展では450円で販売する。ウルトラエルは「U」と「L」の字を使った、ハラさん考案のキャラクター。左はハラさんが高校時代に描いた漫画。「シティーハンター」の影響が感じられる

● 今回のZINE展参加の理由を教えてください。
昨年会社のサイト上に、プロモーションのようなノリで漫画を公開したのですが、今回ZINEの企画展があると聞き、これを機会に紙で出してみたいと思ったからです。
● もともと漫画はずっと描いていたのですか。
小さい頃から漫画家になりたくて、高校時代は『週刊少年サンデー』に投稿し、何度か「あと一歩で賞」に入ると。大学は漫画家になることを踏まえてマスコミ系に進学。でも、パソコンを勉強するなかでDTPという仕事を知り、漫画でもデザインでも作るのと同じ感覚だと思えるようになりました。卒業後、グラフィック・デザイナーとして今の会社に入社しましたが、社長にウェブ制作のきっかけを与えられ、ウェブデザイナーになって今年でちょうど15年目。その間、漫画は全く描いていなかったですね。
● 再び漫画を描き始めたきっかけは何だったのですか。
ある企業のサイトを作る際、漫画形式にする案が出て、久しぶりにコマ割りを描いたのがきっかけのひとつ。それと、その時偶然『週刊少年ジャンプ』掲載の主人公が漫画家を目指す漫画「バクマン。」を読んだのも大きい。「漫画が描きたい」と思ったのです。それで、以前会社のプロモーション用に作ったキャラクター・ウルトラエルを

題材に漫画を描き始めました。このキャラはこれまでウェブの実験をする際に使っていました。漫画の題材としては最適で、自分が今までやってきたことをそのまま活かせる。さらにそれを表現することで会社のプロモーションにもつながると考えたのです。ストーリーもバツと思いつきました。当時のブログを読み返すと、昨年2月14日にスケッチを描き、その1週間後には第1話を公開していたので、一気に描き上げた感じですね。
● 周囲の反応はどうでしたか。
会社のブログと同時に、ブログのページという電子書籍サイトを使って、現在10話まで公開しているのですが、閲覧数としては3万ほど。ダウンロードは800を越え、ブログのアクセスも5000から6000はあります。自分が思っていたよりも随分たくさんの人に見てもらっているなと思っています。社内では「また始まったな」と思われているでしょうけど。それと、今まで本を出版した関係で、翔泳社という大手出版社に知り合いがあったため、この漫画を売り込んだこともあります。エッセイ漫画の路線で企画会議にかけてもらい、結構いいところまで行ったので、ウェブでの連載を続けていけばもしかしたら……、という可能性もありますが、そうなるも今の鉛筆描きからペン入れもしなければいけないし、クオリティも低いので修正が必要ですね。ちなみに編集部のなかで一番評判が良かった

のは、第7話の「モバイル依存女子」というもの。これだけで1冊作つたらどうかという話もあったそうです。
● 実際に漫画を紙媒体にした感触を教えてください。
後半は意識して丁寧に描いていますが、最初の方は直したい気持ちがあります。あとストーリーももう少し導入部分をふくらませたくて、ラフも描いてはあります。それと、編集者からできるだけ短くまとめた方が読みやすいというアドバイスを受けて、4ページにまとめて描いていますが、本当はもっと壮大なものを書きたいという希望もあります。気持ちとしてはいろいろ描きたい、いろいろなキャラの案もある。でもなかなか時間が取れないので、現実には難しいですね。
でも、今回久しぶりに紙媒体に面付けをして、表裏を間違えないよう紙を切って折って……、と作るのは楽しかったです。紙は味わいのある薬半紙にしたくて、大阪のレトロ印刷という印刷所に出しました。表紙は後輩にアドバイスを受けてツヤブリ（隆起効果を出す特殊印刷）に。中とじミシン製法は80ページが限度だったので、ページ数もちょうど良かったんです。
● ウェブ・ディレクターのハラさんにあえてお聞きしますが、ウェブと紙の違いはなんですか。
紙は紙で好きなのですが、ウェブはひとつサイトを作つたら、それを元はずっと育てている感じが好きです。一度作った土台をベースに少しずつ足

して行けば労力はいらぬ。ブログも毎日続けられればサイトのページ数が増えますよね。あとは、いつでもどこでも誰でも見ることができ、日常生活の人間関係とはまた違った出会いがあるところに魅力を感じます。
制作過程においても、画面を見ながら試行錯誤して公開し、ダイレクトにフィードバックが来るのがおもしろい。自分はいろいろとやりたがりですが、紙でフリーペーパーを40号ほど作ったこともあったのですが、それと比べてもウェブの効果は大きいですね。
また、ウェブに関して最近よく言われているのが、情報が集まる場所に人々が集まるということ。例えば、情報拡散力が高いフェイスブックやツイッターは利用者数が急増し、誰かが情報をキャッチすれば一気に広がるんじゃないですか。そういうインターネット特有の効果がここ最近、爆発力を発揮しているという気はしますね。
ただ、電子書籍においてはわりと誰でも出せるという感じもあるんです。それに比べると紙媒体はやはり違うな、と思ったりもしますね。

The reason we make ZINE

profile
ハラヒロシ *Harashi Hiroshi*
1975年生まれ、須賀市出身。デザインスタジオ・エル常務取締役制作部長ウェブディレクター、デザイナー。2005年に長野のウェブクリエイターやウェブに携わる人を中心に活動する「id-Nagano」を立ち上げ、現在代表を務める。翔泳社から、「クリエイターのための3行レシボ ポストカードデザイン」(2008年)や「レイアウト・デザインのアイデアカタログ1000」(2009年)の著書、共著がある。

長野市のデザインスタジオ・エルに所属し、いくつかのデザイン本も著しているウェブ・ディレクター、デザイナーのハラヒロシさん。昨年は会社のホームページ上で、忍者の主人公・ウルトラエルが、忍術・戦術・記憶術を駆使しながら、一人前のWebクリエイターを目指して奮闘するという漫画を公開し、その意外性とクオリティーの高さが話題になった。



ウェブサイトで公開していた漫画を
ZINE展の参加のため紙媒体に
——ハラヒロシ

今まで心に残り続けた文章や絵、写真をずっと一冊の本にまとめたかった

——越ちひろ

profile
越ちひろ Chihito Koshi

1980年、千曲市出身・在住。ちひろという名前は、芸術好きの両親により、画家の岩崎ちひろから命名。2006年、東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻卒業。在学中の2004年、トーキョーワンダーウォール賞受賞。2009年、制作の拠点を東京から地元・長野に移し、店舗の壁画やCDジャケット、商品ラベルなど活動の場を広げる。イベントのライブペイントの依頼も多く、2月11日(土)から始まる長野灯まつりでは、灯ろうにライブペイントを行う予定。

時には衝動的に、また時には叙情的に絵を描き続ける画家、越ちひろさんがZINEの題材として選んだのは、これまでの旅の思い出やずっと気になっていた言葉、日々のドローイングなど10年間の記録。もともと何でも記録しておくことが好きで「旅行に行けば、写真だけではなくチケットや道ばたの花、噛んだガムまで何もかもノートに貼っている」そう、確かにノートには一見するとゴミのよう

うだったり、普通は貼らないであろう立体物が。それに、常に持ち歩いている手帳には、気になったら書き留めている言葉がびっしり並び、ドローイングも大量にあるという。「何でも残すことが自分の絵につながっていると思うんです。そのなかで、心に残り続けた文章や絵、写真などをずっと一冊の本にまとめたかった。」

素材が一番古いのは、ちょうど絵を本格的に始め、今のスタイルを確立した21歳頃の日記。それ以来10年間変わらず好きなものを拾い上げ、ZINEという形にした。「ひとりの人間として生きていくなかで当たり前にならなくなっているものを選んで感じるですね。私が気になったというだけでコンセプトは成立すると思う。」

「直観もコンセプトだと思っんですよ。ZINEの紙選びも直観。インクジェットプリンターで刷った紙は専用紙じゃないけど、既存の概念を越えれば作品の可能性が広がると思っただし、助を働かせてあまりこだわらずに作りました。普段の制作でも、学生時代はシビアにキャンパスを選んでいたけど、今は概念を打ち破って新しいことを生み出すのがおもしろいと思っています。」

03



旅先で出会ったものをまとめたノートや、日々心に浮かんだ言葉を書き留めているモレスキンの手帳、ドローイング集から、ずっと気になっていた好きな言葉や絵、写真をピックアップし、初めて自分で製本して作り上げた今回出版のZINE (3000円)



- ① 1000円以下
- ② ボリューム満点
- ③ サービスよし

めしんばや
ごんぢやな。

【第五回】
中野「三幸軒」

「三幸ラーメン」

寒い季節は、熱々のあんかけが、むしろ普通に食べたくなるんだよ。特にふうふう言いながら食べるのがいいんだよ。今日は中野市役所の南にある「三幸軒」のあんかけラーメン、「三幸ラーメン(800円)」を食べに行こう。

ここにあんかけの特徴は何と言っても地産のキノコ。大ぶりぶりっとした歯ごたえと、じゅわっと口中に広がる旨味がたまらないんだ。あんかけは鶏ガラ、豚のげんこつ、野菜をベースにしているそうで、中太のストレート麺とこれまた良く合うんだよ。

それに、この店のおすすめはラーメンだけじゃない。中華料理を気軽に楽しめる店とあって、一品メニューも豊富に揃っているんだ。年に数回、地酒と中国料理を楽しむイベント「食酒楽会」も開催しているらしい。次回はぜひ参加してみたいね。

長野市で店を始め、25年前に中野市に移店。開店当時から変わらぬスープをベースしながらも、より幅広い層に受けられるようバリエーションに富んだ中華料理をふるまう。ネギがおいしいこの時期だけネギみそラーメン(800円)を出すなど、旬の味にも気を遣っている。

取材：久保田香織 写真：内山温那



中野市大字中野262-5
☎0269-26-0292
11時30分～14時、17時30分～21時
月曜休(祝日の場合は翌日)
<http://sankouken.blog.fc2.com/>

私的文化史

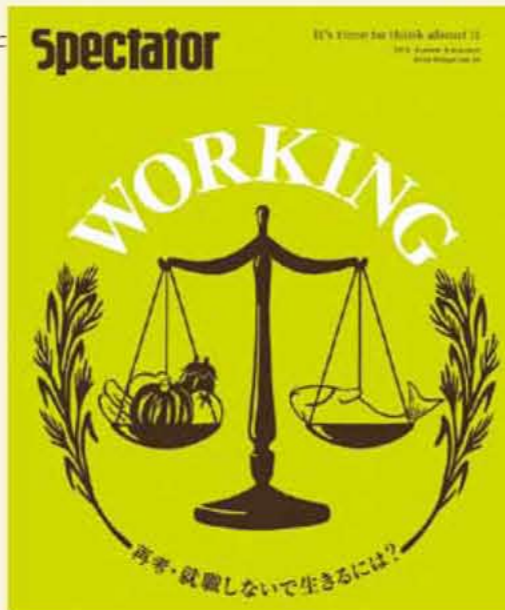
Private Cultural history

vol.05

café amijok
小島 剛

1978年4月26日生まれ。

大学卒業後、金融業、出版社、アパレルと渡り歩いたのち、「繋がりをつくって笑って過ごしたい」と思い千葉県から松本市へUターン。2011年5月松本市中町のはずれにcafé amijokをオープン。昨年11月に生まれた長男に「メロメロ」な毎日を送っている。



age 33 【Book】

ハチドリの一ひとしずく (2005)
「私は、私にできることをしているだけ」この意志を大切にamijokをオープン。

age 32 【Book】

spectator (2010)
この号に限らずこの雑誌はいつも刺激をくれる。「世界は近い」ことを感じる。

age 26 【Book】

もう、家に帰ろう (2004)
将来大切な人ができたらこの本を贈ろうと決意。この年、妻と出会う。



age 29

出版業を経て、千葉県でアパレルへと転職

age 32 【Book】

スリー・カップス・オブ・ティー (2010)
2001.9.11。世界中の「大きな誤解」に気が付いていた青年の行動に胸が熱くなる。



age 23

金融業に従事

age 26

静岡から長野まで、10日かけて野宿をしながら帰ってくる。人との出会いに感謝。

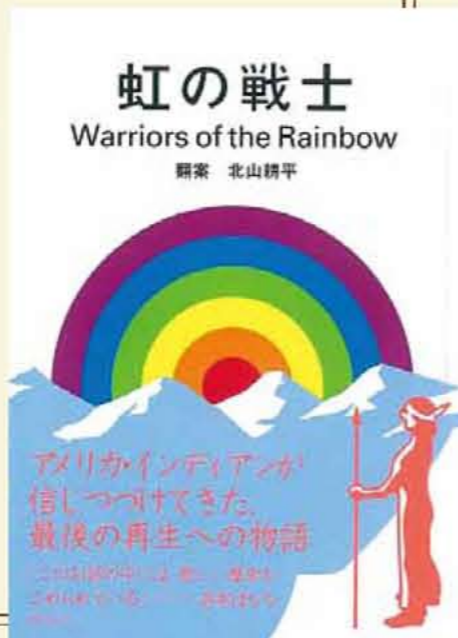
age 17 【Book】

シュナの旅 (1982)
宮崎アニメの原点に触れた感覚。豊かなことって身近にあることを知る。



age 22 【Book】

虹の戦士 (1999)
アメリカインディアンスピリットに感動！今とこれからの「大切な何か」が満載。



age 13 【Movie】

スタンドバイミー (1986)
少年4人の大冒険とその後の決別。ワクワク感と切なさがたまらない。

age 6 【Book】

キャプテン翼 (1981)
「ボールはともだち」。サッカーボールと一緒に布団に入る日が続く。



age 0

はあるかぶり

文=森山裕之

第四回・本日のサービス

《前号までのあらすじ》

長野本社の印刷会社に就職し、東京支社でのサラリーマン生活が始まった。気持ちはまだ学生のまま、理由もなく、毎日焦っていた――。



朝は東京支社で誰よりも早く行かなければならない。九時の始業だったが、遠方に住んでいた後藤部長がラッシュを避けるため、ひとり八時過ぎには来ていた。部長は朝来ると自分の席にドーンと座り、新聞を読み始める。私も八時前には出社し、机を拭いたり、お茶を入れたりするようになった。

朝はもうひとつ大きな仕事がある。S社は長野本社に組版、製版、印刷機能があり、東京支社は営業だけだった。毎朝、前日長野本社で作業されたゲラのコピー、一部抜き(製本前の印刷見本)等、紙の束が本社から頑丈な帆布の袋に入れられ大量に送られてくる。バッグ便と呼ばれていたその袋を、事務所のある三階まで米俵のように担ぎ上げ、荷解きをし、先輩たちが出社する前にそれぞれのデスクに置く。他の先輩社員はだいたい九時前に滑り込むことが多いので、部長とふたり約一時間、私にとっては緊張感のある時間が続いた。部長は新聞を読んでいるし、しゃべりかけていいのかもしれない。最初のうちは届いたゲラや一部抜きをどうしていいのかわからないから、ただ印刷営業や校正記号の本を読むふりをしていた。

外から来る電話の他、事務所は静まり返っていた。届いた荷物の確認をし、電話で本社製の印刷担当者や取り取りをして一時間、だいたい十時には、皆それぞれの得意先に散ってゆく。二か月前先輩営業マンたちについて得意先回りをを行い、ようやく自分の得意先が決まった。とは言っても、当然ひとり立ちできるわけもなく、これから当面一緒に歩く先輩社員が決まったということになる。私がついたのは蛭原課長だった。蛭原さんは大手のH書房をはじめ、中小含め多くの得意先を持っていた。毎朝神田にあるH書房へ行く。朝出てきたゲラや一部抜きを届けるのだが、特に持って行くものがなくても必ず顔を出した。その後、日中他のいくつか得意先を廻り、夕方帰社前にまたH書房

に寄る。入稿やゲラの戻し、新しい書籍の情報を聞いたりする。最初の半年くらい、私はただ蛭原さんの後ろに立っているだけだった。時には領いてメモを取りながら、仕事の内容、担当者のことなどを覚えていった。

朝、H書房の後、蛭原さんはかならず近所の喫茶店Cに寄った。三五〇円の今日のサービスコーヒー(ブレンドではなく日替わりのストレートコーヒー)を飲み、スポーツ新聞、週刊誌をひと通りチェックする。それまでの私には、スポーツ新聞も週刊誌も読む習慣はなかった。ストレートコーヒーを飲みながらそれらを読むことは、新しい世界に入った気がして、少しだけ誇らしい気持ちがあった。マンデリンというコーヒーの味もその喫茶店で覚えた。でも、新鮮だったのはわずかだった。

スポーツ新聞のトップニュースと芸能記事、週刊誌のいくつかの連載コラムを読むと、読む物はなくなってしまう。当時の私には、週刊誌の特集記事はまったく興味のないものだった。今なら隅から隅まで読むけど。スポーツ新聞も同様だった。そういう世界を蔑んでいたというのか、どこか低く見ていた。自分はこの本物を読んでいる暇はない、と。最初は気を遣っていたが、その内、スポーツ新聞を読む蛭原さんの横で、持ち歩いてた小説や評論の本の続きを読むようになった。蛭原さんはそんな私に「こむごむもなかった。」「なんでみんな朝の通勤電車で寝てるんだろう。時間もったいな」と思うんだけどな。電話で、長野に離れて住んでいた彼女に言った。「通勤電車で寝たいのわかるよ、私。森山君はストイック過ぎるよ」同じ年だったが、短大を卒業し、二年早く社会に出ていた彼女に諭された。ストイックだったのか、そう演じていたのか。こんな私の浅はかな知識などなんの役にも立たない。仕事の本当の厳しさ、難しさを知るのは、まだまだもう少し先の話だ。

写真=前田聡子

フォトグラファー。札幌出身。1983年生まれ。長野県の山間部にある温泉集落に暮らして、人間らしい暮らしや昔と変わらない生活に感銘を受け、写真を撮り始める。「人物や自然のあたたかさ」をテーマに撮影を続ける。Blog「ダイナマ日記」日々更新中。http://sakusado.jugem.jp/

寝顔美人

チャンネル。

チャンネル vol.5

発行日 2012年2月9日

編集長 島田浩美

デザイン 青木 圭

ライター 久保田香織

写真 内山温那 前田聡子 モモセヒロコ

広告 伊藤隆之

印刷 有限会社サンライズ

発行 合同会社 ch.

〒380-0836 長野市南県町1069 ch.books 2F チャンネル編集室

☎ 026-217-5687

e-mail mail@chan-nel.jp URL http://www.chan-nel.jp

(本誌掲載の写真、イラストレーション、記事、ページの無断転載および複写を禁じます)
© ch.2011